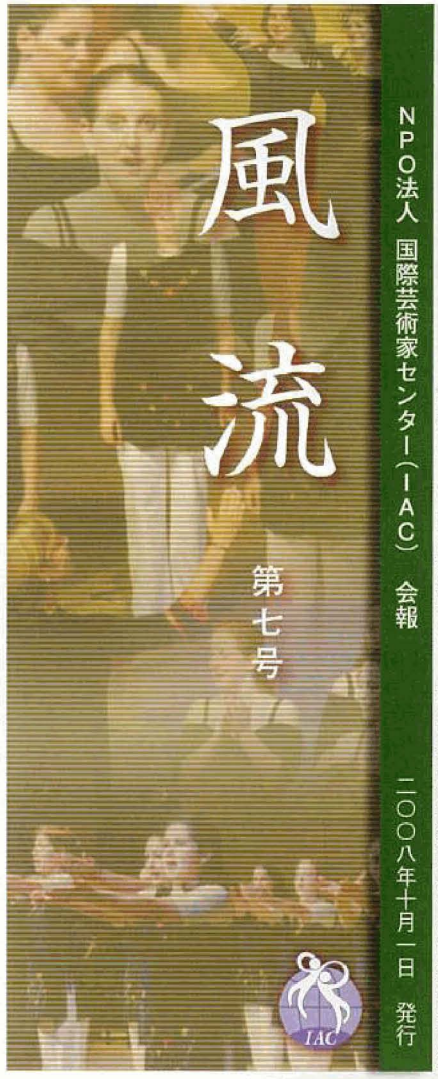
NPO法人 国際芸術家センター（IAC） 会報

風流

第七号

二〇〇八年十月一日 発行



題字背景●IAC「世界の民族芸術シリーズ」モラン女声合唱団（イスラエル）から」（写真：飯島篤）

アウシュビッツの雨

――「原爆の図／丸木美術館」の思い出

音楽家・映画監督／埼玉県教育委員 松居和

丸木位里・丸木俊夫妻の作品「原爆の図」で知られる埼玉県東松山市の丸木美術館に、最後に俊先生を訪ねたのは9年前。位里先生はもう亡くなられ、都幾川を見下ろす敷地から仙人が消えてしまって、風景が妙に明るく感じたのを覚えている。

久しぶりにお会いすると、俊先生は「和君、大きくなったね」と言った。子どもの頃のイメージが強いのか、「ああ、大きくなった、大きくなった」と喜んで下さる。「45歳になりました」と私は言った。あれから9年、俊先生も亡くなり、近頃は八月六日に美術館に行っても、姪の久子さんと思い出話に花を咲かせるだけになった。人は少しずつ居なくなる。

昔、あやおばさん（大道あやさん、位里先生の妹さん）が、刈っても刈っても生えてくる、と笑いながら嘆いていた草はきれいに刈り込まれ、敷地自体は身ぎれいなのだが、暑い太陽の下、蝉の音の中で、美術館が少しずつ朽ちて行くのがわかる。それでいいのかな、という気もする。お二人が居なくなっても思い出は残る。だが過去は個々の人間の歴史認識、未来のための妄想でしかない。私が消えたら、この過去もなくなる。

34年前、二十歳の私は両先生に誘われて、アウシュビッツを見に行った。インドから続いた若者の長旅の途中パリに居た私に、「アウシュビッツで尺八を吹いて下さい」と招待して下さったのだ。

アウシュビッツは雨に濡れていた。展示品の部屋を一つ一つ見てまわり、亡くなった人たちの無数の顔写真に囲まれ、若い兵士達と並んで、プロパガンダのいっぱい詰まった記録映画を見た。ポーランドの印象は暗かった。ワルシャワからクラコウまでの汽車の中、兵士や若者達の刺すような視線を頬に感じ、共産主義には夢が無い、と思ったのを覚えている。若者たちの投げやりな目は、車室で一緒になった老人たちの素朴な明るさとは対照的だった。革命を体験した世代はその名残のなかで生きている。彼らの作った仕組みの中で、次の世代は心理的に飢えていた。俊先生にそれを言うと、社会主義運動を続けてこられた先生は少し悲しそうな顔で私を見た。

「さて、どこで吹いてもらいましょう」。私たちは、見学のコースから外れ、地下室に入って行った。ガランとした何もない、学校の教室くらいの大きさの地下室だった。天井近くに小窓があって、外で雨が降っているのが見えた。

「ここがいいでしょう」と言われ、私は、原爆美術館で8・6にいつも吹いた「片足鳥居の映像」という長崎被爆の鎮魂歌の第四楽章を吹いた。もう一曲、古典の「鶴の巣篭もり」、これは禅宗の曲には珍しく、親子の愛がテーマになっているのだが、それを吹いた。その前に展示場で見た、幼い子ども達の靴の山が思い出されて、吹きながら涙が出た。小さな足がその一つ一つを履いていたのだ。靴の山の隣に、人形の山があった。一つ一つの人形にそれをしっかりと抱いて来た女の子たちの姿が重なり、涙が止まらなかった。人間はこういうことをする。

「ああ、聴いてる、聴いてる。みんな聴いてる」と俊先生が言った。雨が砂利をきゅるきゅるとまわす音が、まるで人々のざわめきのように聴こえた。

「あの時は、すごかったねえ」と一人になった俊先生が言った。「すごかったですね」と45歳になった私も言った。

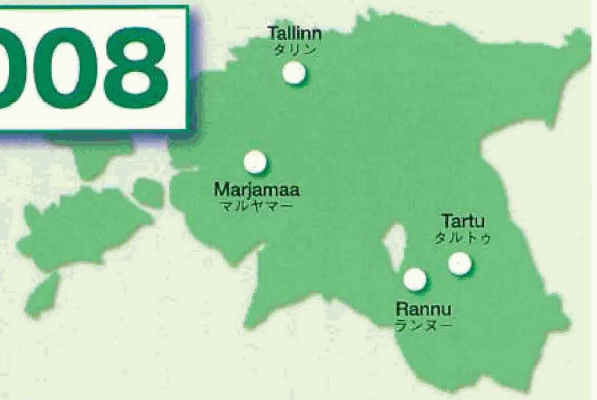
「尺八が良かったわ」と言って俊先生が涙ぐまれた。「ありがとうございます」と私も、ついこの間のような気がした。

今年、私は一本のドキュメンタリー映画を完成させた。南インドのタミルナード州で、ダリット（不可触民）の少女たちを集め、裁縫や読み書き、権利意識について教えているカソリックの修道女が、彼女たちにダンスを教え、差別反対と女性の人権のための公演をしている、という友人の話に触発されて、カメラを買ってインドへ渡ったのだ。「シスター・チャンドラとシャクティの踊り手たち」という。生まれて初めて作ったこの映画が、春、ヒューストン国際映画祭の長編ドキュメンタリー部門で金賞をとった。その喜びがしばらく私を支えた。丸木美術館に行き、仏壇に供えながら、俊先生が生きてたら、なんて言ったかな、と思った。

昨日、大道あやさんの展覧会を見に松濤美術館に行った。私の記憶の中で、あやおばさんには、位里先生、俊先生とは別の存在感があった。位里先生のお母さんスマさんから伝わっている丸木家の遺伝子、ものを見る視点の本流はあやおばさんに一番伝わっているのではないかな、と思う。過去が、一人一人の人間の妄想ではない、という教えがあるような気がする。過去が生きているような気がする。

「シスター・チャンドラとシャクティの踊り手たち」http://sakthi.luci.jp/

マルヤマーフォーク2008



マルヤマーフォーク2008　7月30日～8月2日
祭りサイト　http://www.marjamaafolk.ee/
○マルヤマー：首都タリンから南約60キロの人口約7千人の町
○参　加　国：開催国エストニア、ギリシア、ドイツ、ポーランド、日本の5カ国から合計約150名の参加者が集う。
今回の使節団はマルヤマーフォークの前にランヌーでも交流事業をおこなった。

会員の皆さんが、世界各地で国際相互理解に貢献できる機会を提供することは、IACの大切な活動の一つです。バルト三国の一番北側の国エストニアとの文化交流は、2005年から始まり、写真展、舞踊団ソプラスの来日、そして今年2月の同国独立90周年を記念した舞踊団レイガリトのほのぼのとゆったりとした公演は皆さんの記憶にも新しいことでしょう。

そして、この夏、会員の世良昇子さんと世良留実さんが率いる11名の文化使節団を国際舞踊フェスティバルの「マルヤマー・フォーク2008」に派遣しました。使節団メンバー全員が広島在住か広島出身者でしたので、広島市長の秋葉忠利氏の平和のメッセージと平和市長会議への参加呼びかけをマルヤマーに携える、という大役も務めました。奇しくも63回目の原爆の日に合わせたような祭り日程、さらに開催国のエストニアをはじめとして参加する顔ぶれも戦争に翻弄された歴史をもつ国々でした。これからは、たくさんの国々がこのマルヤマー・フォークのような世界各地の祭りに集い、歌や踊りを楽しめる地球にしたい、と文化交流の役割を再確認させられた派遣事業でした。

広島市長　秋葉忠利　　2008年9月5日

NPO法人国際芸術家センター
理事長　山口　洋一　様

前略　この度は、エストニア・マルヤマー町で開催された民族舞踊フェスティバルに広島からの文化使節として世良昇子氏率いるバレエ教室のダンサーを派遣され、広島の平和のメッセージを伝えることに御尽力くださいましたことに深い敬意を表します。

NPO法人国際芸術家センターは、芸術・文化の交流活動を通じて世界平和の一助となりたいとの発想のもとに発足されたと伺っています。今回のような活動を通して、平和のメッセージを世界中に伝えていくことは、大変意義深いことと考えます。

今後、貴センターのますますの御発展をお祈りいたします。取り急ぎ書中をもってお礼を申し上げます。

草々

秋葉忠利

〒730-8586 広島市中区国泰寺町1-6-34　広島市役所
Tadatoshi Akiba, Mayor
1-6-34 Kokutaiji-machi, Naka-ku, Hiroshima 730-8586
Phone : 082-504-2106 Fax : 082-249-6460
e-mail : kokusai@city. hiroshima. jp

広島市長の秋葉忠利氏からIACへのメッセージ

出演者全員が手をつないだフィナーレ

エストニア体験・マルヤマーフォーク2008に参加して　2008年7月25日（金）～8月5日（火）

■IAC派遣・世良バレエ文化使節団メンバー　世良昇子、世良留実、福島綾子、玉田玲菜、米原麻衣子、岡村弥永子、小泉博美（高校生）、中田友美（中学生）、今岡千絵（中学生）、広川さつき（小学生）、福島和諭己

使節団11名のうち4名の感想と世良留実さんの出発から帰国までの体験記を紹介します。

文化使節団から4名の感想

最後のパフォーマンスが終わった瞬間、達成感でいっぱいになりました。浴衣、法被、足袋という日本独特の衣装はとても珍しいらしく、何度も写真をお願いされました。各国の踊りも興味深く、言葉が通じなくても、踊りで心が通じ合えることを学びました。

―中田友美（中学生）

初めての国際交流は不安でいっぱいでしたが、行く先々で現地の方はとても優しく接して下さいました。舞台の他にも、バーベキューやピクニックなどの交流、さらに各国のダンスチームとはスポーツデーやフェスティバル・クラブでそれぞれの国のダンスを一緒に踊り、とても楽しく過ごしました。

―今岡千絵（中学生）

国際フェスティバルでどんな踊りをするのか、ワクワクしながら発表を待ち、踊りが決まってからは一生懸命に練習をしました。舞台では大変緊張しましたが、皆さんに喜んでいただき、やっと笑顔になれました。

―小泉博美（高校生）

日本の文化を象徴する遊びやお祭りをテーマにした踊りが、様々な国の人々に受け入れてもらえるか、不安を抱きつつ日本を出発しました。しかし、どのステージでも観客の大きな拍手と歓声を頂き、そんな不安はパフォーマンスする喜びへと変わったのです。日本では経験することのできない大自然の中での野外パフォーマンスや異国の人達と踊りを通じ、お互いの文化に触れ合ったことが、かけがえのない経験と思い出になりました。

―玉田玲菜

使節団全員と世話係のエストニアの大学生ケルト（後列中央）と、マルヤマー・フォークの事務局長カイリさん親子（前列右側3人）

エストニア

広島市の秋葉市長のメッセージ（右上）をマルヤマーのエロ・プラムス町長に手渡す

Tartu Postimees
30. JUULI 2008
NR 136 (2651)
www.tartu.postimees.ee

SUVEPILT:
Rannu vald võõrustas Jaapani folkloorirühma

ランヌーでのパフォーマンス
TARTU POSTOMEES（7月30日）

「核廃絶」広島市長の言葉伝え
エストニアの祭典で世良さんら使節団

踊って国際交流

毎日新聞
左：広島版（8月26日）、右：備後版（8月28日）

エストニア体験記

世良留実

●**7月25日（金）** 日本を出発してから24時間、アムステルダムを経由して23時にタリン到着。日本大使館のタイミさんがこの時間にもかかわらずお出迎え。日付が変わったころ、マルヤマーの森の中に建つ、宿となる白い教会に到着。

●**7月26日（土）** 祭り事務局長のカイリさんとアレキサンダーさん夫妻との打ち合わせの後、会場を下見。日本のアニメが好きで日本語を勉強中のエストニア娘のケルトが私たちの仲間に加わる。

●**7月27日（日）** 唯一のお休みの日。踊りの練習の後、世界遺産タリンの旧市街へ出発。バスで1時間、市内電車で10数分で着いた所は入り口からもう別世界、気分は既に童話の中のお姫様。歩き進めば更に夢のような風景が現れて、私達を中世の北欧へといざなう。アッと言う間に過ぎた4時間、帰りのバスに乗り遅れないようにと、ショッピングを我慢してマルヤマーへ戻る。

●**7月28日（月）** ランヌーに向けて出発、3時間のバスの旅は、絵画や映画の1シーンのような美しい景色が続く。ランヌーの町長ウノ・ローツマー氏にコンサート会場（野外）などをご案内いただく。夕方、エストニアでの初舞台。日本のゆかたに観客からため息がもれ、至福の中、舞台を終える。多くの観客に囲まれる人気ぶりで新聞の取材も受ける。
その後、バーベキューとサウナでのおもてなし。広大な土地に母屋・サウナ小屋また小山や泳げる程の池まである素敵なお宅。水着でサウナ体験。サウナがエストニアの文化の1つと知る。食後は大きな焚き火を囲み、踊りながら白夜を楽しむ。

●**7月29日（火）** 午前中ランヌーからバスで30～40分、中南部にあるタルトゥの観光。他の国の支配下でも文化を守り抜き無血で独立を果たしたなどのエストニアの歴史を知る。
午後は再びランヌーのゲストハウスに戻り、湖でのボート遊び、エストニアの歌や遊びの楽しい時間はあっという間に過ぎ、23時に懐かしいマルヤマーの白い教会に帰宅。

●**7月30日（水）** マルヤマーフォークのオープニング。今日から5泊6日の私達の家は小学校の体育館。会場に向かう途中、今年2月にIACが招聘した舞踊団レイガリトの団長カレフさんと再会。
開会式では、参加国の国旗が掲揚され、各国のグループの代表が紹介される。広島から携えてきた秋葉忠利広島市長のメッセージが読まれ、私たちが平和を伝える使節でもある誇りを感じる。舞台では「童」を披露、日本の心を伝えられた手応えあり。

●**7月31日（木）** 午前中、農家の博物館を観光。昔のままの農家の生活を見せてもらう。
夕方の舞台は、絶好調！ アンコールにも応える。マルヤマー町長エロ・プラムス氏から、出席者全員にプレゼントが渡され、ポーランドとドイツの代表からもプレゼントをいただく。夜は、小学校のフェスティバル・クラブで各国のフォークダンスを教えあう。「炭坑節」「広島音頭」「ソーラン節」を各国参加者全員、上手に踊ってくれた。

●**8月1日（金）** 老人ホームの中庭、その後森の中の野外ステージでパフォーマンス。またしてもアンコール。昨夜に続きフェスティバル・クラブでのワークショップも大成功。

●**8月2日（土）** 午前中、運動会で盛り上がる。
日本から持ち寄った民芸品を売るお店を出すハンディ・クラフトマーケットの日。その場で折る鶴や風船も次々に売れ、各国のお店の中でも一番人気。舞台も「ソーラン節」のアンコールではお客様から手拍子がきて大満足。
夕方、出場者全員のパレード。フェスティバルの実行委員がいう「もっとも人気のある女の子達」の日本組は、光栄な事にパレードの先頭。いつもバスで通っていた道路もこの時だけは通行止め。地域住民や観光客に手を振られて、メイン会場まで2キロの行進。最後の舞台とあって観客は3倍位に増えている。「アンコールなしで」と打ち合わせていたが、盛大な拍手に心が動く。それでも日本式の深いお辞儀をして退場。閉会式では、出演者全員で手をつないで舞台を歩く。観客は拍手で見守り、その会場にいる全ての人の心が一つになる。

●**8月3日（日）** ピクニックだったが雨で早々に解散。少し心残り。祭りは昨日で終わり、ほかの国のグループは皆引き上げて、最後の夜に小学校に泊まるのは私達だけ。

●**8月4日（月）** 7：15のタリン発フライトのため3時に起床。皆の見送りを受け、一番つらい時間。熱いハグで「また、会いましょう」

鬼剣舞（おにけんばい）全演目を観る

――みちのく芸能まつりを訪れて

文と写真：中川芳和（IAC会員）

昨年四月十日に開催された「国際芸術家センターの夕べ」で見た「鬼剣舞」に触発され、ぜひ現地で見たいと八月第一土～月に岩手県北上市で行なわれる「みちのく芸能まつり」を訪れた。鬼剣舞の今に伝わる全演目が、天候に係わらずに堪能できそうだと考えたからである。八月二日夕方近くホールに着いた。

最初に岩崎鬼剣舞による、奉納などに向かう鬼剣舞の一行が道ですれ違った時に交わす挨拶である「三式礼」と、回向の祭に唱える「回向念仏」が演ぜられた。一般的な公演では観られない貴重な体験である。鬼剣舞の基本的な踊りは「庭物」と称せられ、舞手は八人でリーダー格の白面一人は決まりごとでも、他の黒・青・赤面の人数構成に決まりは無い。それぞれ阿吽の二種類がある。衣装で特徴的なのは頭に毛采（けざい）を載せ、後腰に大口ゴザと脱垂を重ねて結い、左中指に赤い金剛杵を挟むことである。囃子は太鼓、手平鐘一、笛二～四で、紋付袴白足袋で太鼓打ちだけ白襷を掛けている。

演目を順に紹介すると鬼柳鬼剣舞の「一番庭」、谷地鬼剣舞の「二番庭」、そして二子鬼剣舞と御免町鬼剣舞の「三番庭の狂」。

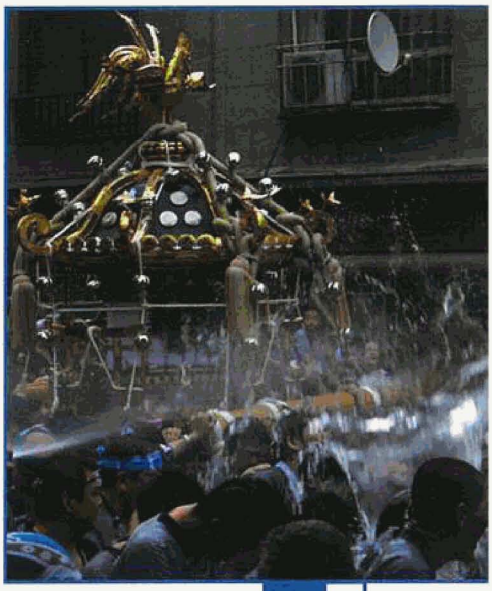
岩崎鬼剣舞の「カッタカ」は猿面（道化面）をかぶった一人踊りで、金剛杵（杖）を二本持ち、振ったり交差したり、股間に突き立てたりして滑稽かつ猥雑な所作を加え、次の庭物を呼び込む、風変わりだが面白い演目であった。

次は相去鬼剣舞による「三番庭」、滑田鬼剣舞と口内鬼剣舞の「一番庭の狂」、御免町鬼剣舞と飯豊鬼剣舞による「刀剣舞」、滑田鬼剣舞による「狐剣舞」が続く。岩崎伝京都鬼剣舞と同札幌鬼剣舞と同佐渡鬼剣舞の三組による「刀剣舞の狂」は「刀剣舞」の崩し。

次からはお待ちかねが続く。飯豊鬼剣舞の「二人加護」、鬼柳鬼剣舞の「むぎり」と余興的な「膳舞」、北藤根鬼剣舞の「カニむくり」と「宙返り」も楽しめる余興的な演目である。岩崎鬼剣舞による「一人加護」はその名の通り一人の仏恩を受けた者の踊りで、扇・太刀・素手の舞からなり、四方を固めながらの力強い踊りは、勇者の面影が伝わる。

二子鬼剣舞の「三人加護」は扇の舞は二人踊り、拍子は「一人加護」と同じ。幣舞に入って三人となり、二人は太刀、一人は幣を振りかざし、拍子は神楽拍子に変わる。

口内鬼剣舞と谷地鬼剣舞の「八人加護」は今日の最後を飾るにふさわしく、観る者を引き込む楽しい踊りであった。



（写真：飯田邦生）

祭り見学会

――八角御輿の迫力に息を呑む

日本民族舞踊団制作室では、8月4日に佃島の住吉神社の、3年に一度の例大祭を見学しました。祭りの中心は八角の大御輿で、水を浴びせられながら月島界隈を練り歩きます。その迫力と周囲の熱狂には圧倒されました。見学後、メディアに大人気の店「ま乃」で「もんじゃ焼き」を賞味しました。参加者はIAC会員と調査研究部員、計7名でした。

（担当理事・松村尚志）

Baltic Tale

北欧ニットのお店 バルト物語

http://baltictale.co.jp/

TVで注目されたマフラー帽子や、カーディガンをご紹介しています☆

募集のお知らせ

- IAC の活動に参加・ご支援いただける法人・個人会員を募集しています。
- 日本民族舞踊団の研究生募集
  体験レッスンあり
  〈自由が丘・石井漠記念バレエスタジオにて〉

詳しくは、事務局にお問い合せ下さい。

NPO 法人国際芸術家センター

事務局便り

▶「アラスカ・デー」（アラスカがアメリカ領になった記念日のフェスティバル）がロシア領時代の首都シトカで今年も10月に開催されます。IAC会員のヴァイオリニストの藤田めぐみさんと後藤環さん、バレエ教師/振付家の世良留実さんは、今年も現地からの熱いお招きに応え、3度目の訪問の準備をしています。、文化交流を継続させるための、資金、時間などをどう捻出するかは、なかなか難しい問題です。しかし、地道に回を重ねていく毎に広がる人との繋がりが、苦労を忘れさせ、問題を解決させます。舞台活動をする方だけでなく、この機会にアラスカの生活をのぞいてみたいと思われる方も、お気軽に事務局にご相談ください。航空券の手配などもいたします。

▶「プロフェッショナル・ボランティア」略して“プロボラ”という言葉を、初めて聞かれる方も多いと思います。専門的な技能を持つ人たちが、その能力を生かしNPOなどを支援することです。IACの執行部は舞台関係者や芸術家が多く構成が偏っているのが、弱点です。IAC会員そしてこれから会員になろうとしている「あなた」こそ、社会の多方面で活躍した経歴や技術をお持ちですね。是非、その技能をIACにお貸しください。特別な要件などなくても、事務局には、いつでも気軽にご連絡ください。こんなことがIACと一緒にできそうというアイディアがきっと湧いてくることでしょう。文化交流は人の力の結集なしでは、継続できません。

（理事・事務局長　金屋輝美）

IAC会報「風流」第七号　2008（平成20）年10月1日発行（年4回、1・4・7・10月発行）

発行：NPO法人国際芸術家センター（IAC）　編集：「風流」編集部　〒156-0051　東京都世田谷区宮坂3-20-10-206　TEL：03-5426-2047　FAX：03-5426-2048

E-mail：iactokyo@d1.dion.ne.jp　http://www.d1.dion.ne.jp/~iactokyo/